

「希望という名の森」を育てよう

第一生命経済研究所 特別顧問 山口 公生

これからのわが国の目指すべき目標は、「希望に満ちた国」を作りあげることである。経済成長や社会保障の充実もそのための手段と言える。

ただ、希望と一口に言っても抽象的で、つかみどころがない。わが国では、これまで希望を掘り下げて研究する学問は見当たらなかった。

近年、東大の玄田教授らによる希望学の意欲的な研究が始まっており、これからの成果に大いに期待したいところである。これは、最近、希望が持てなくなったという社会の声をきっかけとしているが、希望という言葉の定義からして難しく、難問である。

しかし、希望に満ちた国作りをこれからの目標とするならば、敢えて希望というつかみどころのない言葉に挑戦し、その要素について考察を深めてみることに意義があると考ええる。

希望は元来個人レベルの様々なものであるが、まずは個人の心に「希望のともし火」をともすために、人々を絶望に追い込むような社会環境を作り出さないことが大前提となる。それは希望の実現可能性を失わせるからである。

その上で、希望を生み出す自己の力、すなわち努力が求められる。ともすれば、希望は他人が与えてくれるもの、願えばすぐに手に入るものと思いがちであるが、それは誤りである。経済的に豊かな社会では何でも手に入ることから、この誤解が生まれる余地が大きい。ここはしっかりと教育やしつけの役割が大切である。

努力という自己の行動を経て初めて精神的な充実感が得られるとともに、新たなる希望へのつながりが生まれてこよう。

ただ、これだけで十分とは思えない。社会生活を営む人間としての性質から、他人の理解が

なければ希望もそのための努力もむなしく感じられることが多いのではないか。心の通じ合いがあれば苦しい事も切り抜けられる。この点、社会から「理解しあうこと」をなくしてはならない。人の話に耳を傾ける温かい社会になることが必須だ。

さて、希望にも排他的なものと非排他的なものがある。このうち非排他的な希望は、時として社会共通の希望となりうる。わが国をもっと良くしたい、地域を活性化したいなどが社会共通の希望であり、各自が力を合わせ、これを育てていくことがわが国を「希望に満ちた国」にしていくことに繋がっていくであろう。

ただ、このとき政治の果たす役割の限界をよくわきまえておく必要がある。その役割は価値観を強要、誘導したりすることではなく、あくまで環境を整えることにとどめるべきである。

なぜ今わが国を「希望に満ちた国」にすることを目標とすべきか。それは希望が失われたすとスパイラル的に国や社会が輝きを失うことに繋がるからである。

希望は新たな希望を生み育てる。この好循環が人々の生きがいを増大させてくれるし、社会に真の連帯を生み出すであろう。

以上の話は、希望を森や樹木にたとえると分かり易い。個々人の希望を樹木とすれば、さまざまな樹木が競争しつつも次第に調和を保って共存し、森を形作っていく。この森が社会的に共有された希望である。そこにはいろいろな花が咲き、小動物や昆虫が楽しい空間を実現してくれる。しかし、自然林も何らかの手入れが必要であり、放置すると荒れてしまう。日本という美しい里山を守り、つくりあげるため、力を合わせて「希望という名の森」を育てよう。